

飯繩おろし

丸尾 聡

登場人物

アオ（青木強）

シバタ（柴田みはる）

ハリー（原山治男）

マッスル（笠原和義）

会長（唐沢賢人）

コンドウヒデキ（近藤秀樹）

シマ君（島克也）

山太郎

甲子千春

シマ君 だれー。

ハリー くっだらねえ話だ。

コンドウ 言い伝えには、本気な話があるって、ばさま（婆様）がえってたし。

ハリー おめーた、馬鹿だ。

アオ こっちこー。こっちこー。

シマ君 なにー。

アオ 鬼女こっちこー。

シマ君 ・・ほんとに来たら、どうするだや。

アオ 見てえもん。こっちこー。こっちこー。

シマ君 ちゃんこづくな。

アオ ・・・

コンドウ 来るのは、鬼女でなくて山太郎だ。

また、ばば、と激しく風の音。

コンドウ 飯繩おろしだ。飯繩おろしの風が窓を鳴らしただ。

会長 雪、また強くなった。

少年たち雪を見ている。

山太郎 来たぞ。

千春 え。

山太郎 おめーた特別だ。行かずか。

千春、山太郎と子供たちに誘われるように、あの頃に。

作者の感覚でいえば、懐かしさを感じさせるような時代。1975年〜80年頃と思われるが定かではない。まだ、バブルの兆しは、兆しでしかない頃。貧しさと凜々しさが残っていた頃。
懐かしさを感じさせるような場所。高校。木造の建物。教室。

大雪で、午後から閉鎖された学校に残ってしまった、あるいはあえて残った人たちの一夜の話。

1

高校の本館から少し離れた旧館。木造の建物。かつて使われていた机や椅子が無秩序に並んでいる教室。古ぼけたストーブ。まだそれほど遅い時間ではないが、雪が降っていてかなり暗い。アオがライトを持って入ってくる。ストーブをしきりに調べていたが、

アオ シマ君、シマ君、シマ君・・・、（と再び廊下へ）

しばらくすると、シマ君の「アオ、どっちだ？」の声が出て、二人やってくる。

アオ こっちだえ。シマ君、これ。（とストーブを）

シマ君 （灯油の表示を見て）ろくすっぽ残ってねえ。

アオ だども、ねえよりいいし。

シマ君 ……

アオ シマ君、怒っただけか。

シマ君 なして。

アオ ……おら、ストーブめつけたでええ気になったわ。かんべんな。

シマ君 えだねか。

アオ え。

シマ君 ええ気になっても。

シマ君、ストーブに火をつけようとしている。

アオ ええだか。ええ気になっても。おら、めつけたもんなあ。まんまだったら、凍みて凍みてどうにもならねもん。危なかったなあ。こ

れ、東京の叔父さんからもらったペンシルライト。これ。

シマ君、そのペンライトを取り上げ、

シマ君 あずかつとく。

アオ え。だけんど・・・

シマ君 ちよんこづくなや。

アオ ……

ストーブの蓋を開けペンライトで中を照らし、しばらく見ているが、

シマ君 灯油、出てきた。

アオ やー出てきたわ。シマ君、だれにおさった、ストーブの点け方。

シマ君 別にだれんも。

二人、ストーブをのぞき込んでいる。雪が降っている。

アオ やだくなるなえ。

シマ君 ……

アオ あー、えまえましい。

シマ君 よからず。(ず、は肯定の意) えだねか。

アオ なにー。(何を言っているのか、の意)

シマ君 よからず。なんでも。

アオ ……おらほう、なにしとるだで。こんなところで。

シマ君 火。

アオ あ？

シマ君 火は。

アオ あー。火、ねえ。

シマ君 火なきや点かねえ。

アオ あん。

会長やってくる。

会長 火、あるぜ。

アオ 会長……

会長、ライターを出す。アオ、シマ君、少し驚く。会長、生徒手帳を破り火をつけ、ストーブに入れる。火がつく。

アオ あ、じゃあ、皆の衆、呼んでくる。

会長 アオ。マッスルとコンドウヒデキは二階に行った。

アオ うん。

アオ行く。

会長

雪まだやまねえな。

シマ君

こりや、まだ降るで。えれえこと積もるさ。

二人降りしきる雪を見ている。

会長

しんしんしん、しんしんしん、しーん、しーん、しんしんしん……

やがて二人、振りしきる雪に飲み込まれていくように。

2

ストーブの火が入った教室にアオ、シバタ、ハリー、マッスル、会長、シマ君がいる。皆、高校生である。皆適当に椅子に腰掛けたり机にもたれかかったりしているが、ハリー（原山）だけは、皆に背を向けるようにして、一人教科書を開いている。雪はまだ降り続けている。ずっと続いていた沈黙があって、

シバタ

……とにかくここでこうして待ってるしかないわけだから、ね。

皆、黙っている。

シバタ

……原山君も、ね。

ハリー

……

シバタ

ねえ、

シマ君

シバタ、あんましハリーにちよっけえだすなや。

シバタ

でも、

アオ

デモは日本共産党。

マッスル

はあ。

シマ君

マッスル、なにがはあだ。

マッスル

感心して。

シマ君

感心すんなや。

アオ

ふふ。「まあ、その〜。」（田中角栄の物真似で）

シマ君

アオ、口聞くなや。

マッスル

は。田中角栄は、この前首相やめたで。な、シマ君。

シマ君

……

シバタ

じゃ、原山君はとりあえず抜かして、

シマ君

なにー。（なんだって、といった意）おらだってやるってえってね

アオ

えさ。アオも。

アオ

う、うん。でも、大日方先生が手伝ってやれってえわったで……

マッスル おら、やります。

アオ あん？ マッスル、お芝居やるの？

マッスル やるだ。うん。

アオ 会長は、どうすっただかえ。

会長 おれ？ うん、いいよ、やっても。

シバタ ありがとう。

会長 いや、生徒会としても責任とらなきゃいけないし。やりましょう。

シマ君 ちえっ。

コンドウが顔を出す。彼は食料を探しに行っていた。

会長 お、コンドウヒデキ。

コンドウ ダメだ。なんもねえ。

シマ君 あるわけねえさ。もうどこもみたし。

コンドウ でも、腹減って我慢できねえし。

会長 あ、用務員室の一番奥、扉の向こう。

コンドウ まだ見てねえや。

会長 一番ありそうじゃない。

コンドウ うん。えってくる。

コンドウ行こうとするが、

コンドウ シバタ、ほー。

と数枚のわら半紙を渡そうとする。

シバタ なんだや。

コンドウ 頼まれとったの、書いてきたし。

シバタ あ、ああ。

コンドウ ほれ。(と近くにいた会長に渡す) じゃ、えってくる。

コンドウ行く。会長、シバタに渡そうとするが、そのとき風が吹いた。

アオ (気がついて) 今時分、おかあやおとう、気づいてんだねえか。

シマ君 なにー！

アオ もう帰ってもおかしくね時分だで、おらたちが閉じこめられて帰えれねえの、気づいてさ、

マッスル (さえぎって) ああ、ほうだ。

アオ なにーマッスル。

マッスル おらほう、妹が帰えってるし。おらだけ帰えらんかったら気づくんでねえかい。

アオ したら、むけえに来るし。(迎えに来るの意)

マッスル ああ。
シバタ 別に気づかなくていい。
マッスル え。
シバタ 帰っても仕方ねえもん。

少し沈黙。

会長 でも、なんか愉快じゃん。
シマ君 愉快？

会長 ああ。どっちにしてもこっちも出られないんだから、向こうからも
迎えに来られないんだけれどさ。誰もいない学校に俺たちだけいる
って、なんか愉快じゃん。外は季節外れの春の大雪。帰るに帰れず。
じゃあ、ここにいることを楽しもうって感じかな。

シマ君 街の衆は、なにこくだか。

会長 ……でも、やっぱりちよっと冷えるか。

アオ (嬉しそうに) ストープ無かったら凍えてたし。な。会長。

会長 うん……

アオ な、な。おらが、油見つけなんだから凍みてたや。なあ。

シマ君 聞いてりや、いつまでこくだ。

アオ ……

会長 まあ、この旧館のストープに灯油が残ってただけで、いいじゃない。

シバタ しばらく使ってないんだろ、ここ。

アオ 鉄筋コンクリの新校舎出来たで。

シバタ 油って悪くならないのかしら。

しばらく沈黙があつて、

シマ君 天ぷらじゃねえやし。

会長、ちよいと間があつて吹き出す。

シマ君 なにー。

マッスル 天ぷら油……(と笑う)

シマ君 そんなおかしくねえし。

二人笑っている。

シマ君 (考えるが) おかしくね。

アオ (なんでおかしいかわからず) ああ、たしか、おかしくね。

いっそうおかしい会長、マッスル、シバタも笑い出すが、

ハリー ちっと、ちっと、口閉じてけれ。

ハリーは、それまでずっと教科書を見ていた。そしてまた教科書に

目を落とす。

会長　なあ、ハリー。

ハリー　なに。

会長　あのさ。

ハリー　なに。

会長　あのね。

ハリー　だからなに。

会長　ハリーは、なんでハリーって言うの？

ハリー　・・・

会長　ねえなんで。

アオ　原山だからでねえの。

ハリー　ハリーでねくてええ。

会長　うん？

ハリー　ハリーでねくてええ。

アオ　ほんじゃ原山治男かや。

ハリー　・・・

会長　ハリー。

ハリー　ねくてええって。

会長　じゃなくて、こんなところでこんなときに教科書みてて、頭に入る？

ハリー　入る。

会長　ほんとに。

ハリー　・・・入んね。

会長　だろ。じゃ、

ハリー　会長はええさ。推薦だもの。決まってるさ。おら、違うし。

会長　・・・

ハリー　おらほうんちじゃ勉強できねえから、学校残ってただけで、おめた

ちと違うから。

アオ　赤んぼ泣くだし、勉強できねえやし。

ハリー　ああ。予餞会の出し物の相談なんか関係ねえし。

シマ君　「用のないひとは早めに帰りましょう」って放送流れたし、はええ

とこ歸えりやよかったでねえか。

ハリー　・・・寝てた。

シマ君　そりゃ・・・ダメじゃねえか。

ハリー　ちっとだけねみって、勉強せようって・・・だから・・・、もう、

ええって。

皆、黙るが、

アオ ハリーってかっこええしない。
シバタ うん。

ハリー、また背を向け教科書を見ているが、

ハリー クリント・イーストウッドに似てるから。
会長 え。

ハリー クリント・イーストウッドに似てるって、姉ちゃんがつけた。

明らかに似ていない。

シバタ 似てないよ、原山君。

シマ君 「ダーティハリー」のハリーだかや。

アオ 原山のハリーでねんか。

シマ君 おめ、本気さ、ロサンゼルス市警殺人課だってえってんのか。

マッスル おめとこの姉ちゃん、どしてそねーなたーごせった？

ハリー ・・・だから、だから、原山治男でええっていったし。

マッスル だねか。

会長 似てねえー(笑い)

ハリー マッスルだつてとっぴよーしもねえあだ名でねえか。筋肉って、ありもしねえのにらっちもねえ。

アオ それが反対だからおもしろいんだなや。

マッスル筋肉ポーズ。

ハリー 全然マッスルでねえだや。

アオ ・・・うってかえしばかり、いうなや。(反抗的なことばかりいな、の意)

ハリー なんせった。(何て言った、の意)

マッスル これからマッスルになるし。今、鍛えてるところだぞ。

アオ はあ？

シマ君 そういや、このめえコンクリの固まり持ち上げとっただなえ。

会長 なんで？

マッスル ・・・

アオ へえ、べこの相手するのに鍛えてるんかいや。

マッスル えんにや。

アオ へえ、さっぱわかんね。

なにか廊下の方から物音がする。

アオ ・・・何かいるんだかや。

シマ君 コンドウヒデキだねえか。

会長 コンドウ、コンドウ、コンドウヒデキ。

ハリー 食わね。

コンドウ おめは。

マッスル もう、ええだ。腹えっぺだ。

コンドウ ……

マッスル しこったま食っただ。

コンドウ まだ、えっぺあんのに。だども、だれがおいてってくれただや。こんなおごっそう（御馳走）。

ハリー 山太郎でねえだか。

コンドウ ああ、かもしんねな。

ハリー へ。馬鹿いつてら。

コンドウ なんで。おらがチキンラーメン好きだからかや。

会長 そうかもしれないな。

コンドウ おら、ラーメンでもありやしねかやってかんげーとったら、あっただ。（会長に）食うかや？

会長 いや、ごちそうさん。

コンドウ マッスル、ほー。

マッスル だからえらねって。お湯もねえのによくそんなえっぺくえるし。ぶっくりけるんじやねえか。

ハリー だれー。深山郷のもんだもん。なんでも食うだ。えってえ、いくつ食うだかや。みーせー。

マッスル （少し慌てて）そういうわけじゃねえけど……、えっぺだから。へえ。シバタはえらんのか。

シバタ ……

コンドウ シバタ。

シバタ えらねえ。（いらない、の意）

コンドウ ほれ、つばでふやかしてやるかや。

シバタ えらね。もうちーとで終わるから。（読むのが）

会長 コンドウヒデキ、後で腹でふやけるぞ。インスタントラーメン。そうかや。

会長 おお。腹でふやけてふくらんで、腹やぶれっぞ。そういう人がいたんだ。

コンドウ ほんとかや。

会長 嘘。だまかした。

コンドウ だまくらかされた。（笑う）

会長 でも、あんまり食べ過ぎるとほんとに後で大変だぞ。

コンドウ しんぺえ（心配）しねっても、これでやめるさ。あん、シマ君とアオは、まだあっちゃこっちゃほっくりあるいてるんかや。

マッスル、シバタの読んでいるものが気になっていたが、

マッスル あ、ああ。

コンドウ あん。アオも、腹えっぺになったら、すぐちよんこづいておもしろえやさ。な、ちよんこづくって、方言って知ってるかえやあ。

ハリー (驚く)

マッスル はあ。(感心して)

会長 調子づく、かな。

コンドウ な、ハリーおでれーたし。

ハリー なんも。ハリーってせうな。

コンドウ なんてかや。

マッスル 似てねえから。

会長 (笑い)

ハリー 違うし。深山郷のもんに言われたくねーし。呼ばれたくねーし。おかに口聞いちゃえけねって言われてるし。山山中、帰えりやええだねか。

会長立ち上がって、ハリーに近づく。

ハリー なにさ……。

会長 原山君、謝れよ。

ハリー そんでもさ、コンドウヒデキ公務員試験受かったし。

会長 いいから。

ハリー なにー。公務員受かって赤飯炊いたし。

会長 あやまれて。コンドウヒデキに。

ハリー なにー。わからねえし。街衆にはわからなしねえ。

コンドウ ・・・公務員だけしか受からねえし。ほかのところはとってくんねから。相撲取りもどうかってえうけど、食うのは負けねだども、おら背いはこまいし。別に頭もよくねえし、やまだしだし、公務員受かって赤飯だ。おら、それでいいだ。

会長、ハリーの胸ぐらをつかむ。とシバタが、

シバタ えらくできる。

ハリー (つかまれたまま) なにー。

シバタ コンドウ君。えらくできる。

コンドウ できてるって……、そうかや。

シバタ うん、できてる。「鬼女紅葉伝説」

会長 キジヨ?

シバタ オニオンナだ。

会長 ああ。演劇の脚本?

コンドウ 脚本じゃねえさ。言い伝えや昔がたりをちよっくらちよいとまとめただけだし。

シバタ 鬼女紅葉が、この村じゃ、「紅葉さん」て呼ばれて尊敬されるところが、特にいいし。

コンドウ ああ、そりゃ深山郷の話だ。ばさまに聞いたし。ほかん土地とは、ちよいと違うだで。

マッスル ちよっくらちよいと、読ましてくれや。

コンドウ えらく熱心だなや。

シバタ 笠原君は、自分からやるっていったんだや。

会長 へえ、今度の演劇？

シバタ 予餞会の後に、三年生が在校生に、お礼の意味でお肴をやるし。

会長 お肴って・・・。

コンドウ このあたりじゃ、宴会の時の余興をお肴ってせうだ。

会長 あ、郷土史研究部部长。

コンドウ なにせうだ。てーしたこんねえだ。みな知ってるで。

シバタ そのお肴で、今年は私たちのお芝居やることにしてーんさ。これをもとに台本拵えて。

ハリー 私たちに、おらはへえってねえせったよな。

マッスル 口閉じて。

マッスル 熱心に読んでいる。

会長 ・・マッスルは、畜産の学校に決まってるんだよね。

マッスル (読みながら)・・・ああ。

ハリー ウシチチ屋だから、学費安しくなってるらしいな。

マッスル ああ。県から援助金出てるし。

会長 家を継ぐんだ。

マッスル 決まってねーし。

コンドウ あん？

マッスル えま、まだ決めてねーし。

会長 だって、畜産の学校行くのは決まったんだろう、もう。

マッスル ・・・

ハリー あん。学校や就職が決まった奴が集まって、お肴でもなんでも稽古したらええさ。おら、暇がねえ。

会長 なーにあせってるだー。

ハリー え。

会長 わかるけど。

ハリー ・・・

マッスル (わら半紙を見ながら)「遠い昔、清和天皇の頃、伴大納言は放火

の疑いで都を追われた。一族は、そのち流れ流れて信州信濃の戸隠に行き、さらに流れて飯縄山に住み着いた。その子孫で幼い頃呉羽と呼ばれたおなごは、不思議な妖術を身につけていた。」なんかぞくぞくするし。

シバタ

「呉羽は、成長すると名を紅葉と改め、長者と結婚したが、都に憧れ、己の不思議な力を利用して長者から大金をだまし取り、都に上り、源経基に召されて、子を身ごもった。しかし、その夫人を殺してそれに取って代わろうとしたので、再び飯縄山に流された。」

コンドウ

深山郷のもんは、この、都から戻ってきたえれえきれえなおなごを敬って、紅葉さんと呼んでいただ。

会長

紅葉さん……。ね、なんで鬼女を紅葉さんと呼んだんだろう。

コンドウ

……。

マッスル

でけっかな。

シバタ

え？

マッスル

この芝居、おれでもできっかな。シバタ。

シバタ

わからねえけど……

マッスル

ええ。

シバタ

できっさ。きつとできっさ。

マッスル

うん。

シバタ

……。わたしもでけっかな。

マッスル

だれー。シバタは、演劇部で、東京の声優学校受かってっから。

ハリー

シバタ、台詞言ったことねえだに。

シバタ

……

ハリー

舞台に立ったら、台詞ぜんぶ忘れるそうだ。ほら、三組の野添洋子が、シバタにや台詞言わせらんねって。野添はいつも主役だもんな。

会長

原山。

ハリー

会長、そんただことええかって心配してるんだってさ。みすみす負けるってわかってるこんやって、どうするんかやってこっさ。

会長

負ける？

ハリー

そうさ。そんなら言うだだ。シバタのえく東京の声優学校は、だれっでもへえられるだ。

マッスル

あん？

ハリー

受けた人数だけ、定員が増えるだ。金払った人数だけへえられるだ。

マッスル

あん？

ハリー

だから、シバタが、演劇部で勉強しとったから受かったんじゃなくて、金払ったからへえれたの。

マッスル

はあ。

ハリー そんなシバタが東京行って、勝てるわけねえやさ。ものにならねえことやったって、そんなやだこんねえさ。

会長 そうかな。

ハリー なにー。進路は一生の問題だで、本人のためにならねーだ。そうじゃないんかや、会長。

会長 だからハリーは勉強してるのか。勝とう、と思って。

ハリー そうさ。勉強してたら・・・、ええことあるしない。ええこと。

コンドウ ええことって。

ハリー そうさ。いろんなしんぺえ（心配）もねくなるし・・・、偉くなっかもしれないえし・・・

コンドウ 田中角栄は、小学校しか出てねかっただも・・・

ハリー だから、ダメになったせーの。

会長 ・・・・

ハリー 会長、そんな振りしてもだめだ。会長だつてさ、推薦で東京の学校行くしない。

会長 うん。でも、断つたんだ。推薦。

コンドウ あん。

シバタ 東京えくんでねえの。

会長 わからない。

ハリー ・・・・。なんでー。

会長、たばこを取り出し吸う。驚く皆。

マッスル ふ、ふ、ふ、

ハリー 不良じゃあ。

アオ、シマ君、来た。

シマ君 やるもんだで。

アオ はあー、ぶつたまげた。

マッスル はあ。

シマ君 シバタなんかさあ、口もきけなくなってるし。東京から来た衆は、タバコまでも新発売だし。

会長 で、どうだった。

シマ君 コンドウヒデキが悲鳴を上げたのは、とがめらんねやな。

コンドウ ほーれ。

会長 いたの。（とコンドウヒデキの悲鳴の真似）

シマ君 えた。

アオ めっけて、でかさわぎおでれえたさ。しっぽもごぶてかったー。

コンドウ ありや、オナガ（ネズミのような動物）でも種類が違うんでねえか

な。

シマ君 ネコっくれえあつたな。

ハリー ありっこー。(あるわけはない、の意)

シマ君 おめ、誰に言っつた。

ハリー ……

アオ てーしたこんねえだ。東京じゃ、イヌっころくれえのオナガがえる
つて。

ハリー どこー。

アオ そりゃ、地下街とか……。えるしない。

シマ君 えるわけねえし。

アオ えるつて。東京だもん。

少し沈黙。

アオ おら、この最後の春休み東京行くし。方言ださんようにけーこ(稽古)してるだ。な、会長。

会長 あ、ああ。

アオ おさつてるだ。

マッスル はあー。

アオ 東京えつたら、東京えつたら、方言は、せわねえ。

会長思わず笑う。

アオ 何がおかせかや。

会長 アオは、東京いつたらどこ行きたい？

アオ はい。(標準語で) 叔父さんが秋葉原で働いておりますので、そこに行きたく思っています。秋葉原は、町中ピカピカしていて、明るいそうです。東京の高校生はみんな秋葉原で買った電子卓上計算機を持ってしていると聞きました。あー、こんだ(今度)、ホームビデオ買っていつでも好きなときにテレビ見られるんが、発売されるし。

マッスル はあー。

シマ君 感心すな。

アオ 叔父さん言っつたしねか。やー。(失敗したことに気づいたときの感嘆符)

会長 どした。

アオ ペンシルライト。

シマ君 あずかっつく。

アオ だども、

シマ君 ちゃんこづくなや。

アオ ……

シバタ ちっと寒くねってきた……。

会長 (ストーブを確認し) まだ、大丈夫だよ。

コンドウ 冷え込んできたんでねえか。

アオ へへへ。灯油、あっちのストーブにも残ってたで。なあ。

シマ君 ああ。えっぺある。

しばらく沈黙。

コンドウ ……えっぺ降るなあ。

会長 うん。

アオ 東京は、雪、滅多にふらねって。

シマ君 えっぺ降るから、ここらあたりの暴走族は、悪くなりきらねえし。

皆見た。

アオ なしてかえ。

コンドウ 雪降ってる間は、二輪車無理だよ。

シマ君 チェーンつけるわけにもいかねし。

会長 そうか。半年近くは営業停止か。

アオ 営業停止……、(おかしくなって笑う)

シマ君 (アオをはたいて) 雪降ったらやることねえし。

会長 スキーができる。

シマ君 はあ、あんなもん、(地)の人間がやるんもんでねし。

シバタ そんなでも、うちの兄ちゃん、スキーの話と車の話ししかしねし……

ローンてのが出来るってね。

シマ君 地元で就職したもんは、だんだんそうなるし……。

マッスル 雪やだし。

アオ 雪、滅多にふらねって、おじさん……

コンドウ 行ってみて。

しばらく沈黙。

ハリー なんで。会長、なんで推薦やめたんだや。

会長 わかんないんだけどさ……。なんか、まだ決められないような気がして。

ハリー か……。かっこええな。おら、やっぱし馬鹿なんかや。

皆、ハリーを見る。

ハリー コンドウヒデキ。

コンドウ うん？

ハリー すまねかった。

コンドウやがてうなづく。
マッスル、筋力トレーニングを始める。みな驚く。以降、マッスル筋トレを続けながら。

アオ
はー？

マッスル
手紙さ書いただ。

シマ君
はー？

マッスル
ファンレターだ。

シバタ
役者さんにかや？

マッスル
んだ。

シバタ
だれ？

マッスル
渋い脇役の人。きっと誰も名前しらね。

コンドウ
何で書いただかや。

マッスル
聞きてから。

会長
なに。

マッスル
テレビに出るんは、どうするかってこと。

シバタ
えー。

シマ君
はあん、こりやウシチチ屋がおったまげるようなこと言ったわ。

ハリー
そしたら、

マッスル
そしたら、その人は、何とかいう劇団の人で、まず鍛えろって。体

鍛えろって。

会長
だから、か。

マッスル
雪やでも、やまねうちはなんもできねえだで、体鍛えりやええこん

だ。

コンドウ
そいで、おめんとこは、ウシチチ屋はどうするだや。

マッスル
知らねえ。

ハリー
畜産学校、えかねのか。

マッスル
知らねえ。わからねえ。どうせていいか知らねえ、わからねえ。だ

から・・・、雪やむなー、もうちつとやむなー。な、な・・・

降りしきる雪と少女少女の行き場のない不安と焦燥。

シマ君、床を踏み始めた。アオ、それに続いた。やがて皆も。上履きを脱いで机を叩く。イスで床を・・・。そのリズム激しく。シマ君、暴走族になって走り始める。

シマ君
えだねかえだねか、東京でねくてもえだねか。ここでスキーして高級車買うし。半年走るし。

アオ、それにならう。マッスル、筋トレをはじめた。シバタ、発声練習を始める。ハリー猛然と勉強を始める。

会長
・・・飯縄山から吹く風が ばばば 粉雪さ 舞上げた。

コンドウ 粉雪紛れて 山から太郎さ やってきた。
会長・コンドウ なして来たんか。

コンドウヒデキ、会長、降りしきる雪を見つめている。

4

コンドウが浮かんだ。

コンドウ 飯縄山に流れ着いた紅葉は、都で身ごもっていたえんらい人の子供を、ここで産んだ。子供が大きくなると、紅葉は山から下りてきて、里の村を襲い略奪を始めた。不思議な妖術の力を使って。紅葉は、村々で鬼女紅葉と呼ばれるようになった。

会長 紅葉は、女衆のくせして、強奪し人まで殺した・・・

コンドウ 御門の血を引く子供が、田舎でみぐさく育つのが耐えられなかったかしれね。

会長 御門？

コンドウ 清和源氏の祖、源経基は、清和天皇の孫だ。

会長 ……

コンドウ そえで、都までも鬼女紅葉の噂は広まって、征伐隊がやってきたし。それから。

コンドウ 終わりだ。

会長 どういうこと。

コンドウ なんもおしめえ。

会長 わからない。

コンドウ こんでおーしめ。

会長 ……

コンドウ うちのばさまの昔語りの最後はいつもそうだ。こんでおーしめ。

会長 ……

いつのまにか辺りは明るくなっていた。また、前景からしばらく時間がたった教室に会長とコンドウの二人。と、いつのまにかシバタも来ていた。

コンドウ 深山郷だけの話、鬼女紅葉は、今でも紅葉さんと呼ばれとるなえ。
会長 紅葉は、深山郷のことだけは襲わなかった・・・。

コンドウ 自分に親切にしてくれたとを、襲う人はいねえやし。

会長

・・・

コンドウ

深山郷のものは紅葉さんに親切だったで、紅葉さんはおけえしに、都の布の織り方や読み書きやら鉄の鍛え方やら、おせてくれただ。なんで親切だったんかや。深山郷の人だけ紅葉さんに。

シバタ

コンドウ

ありや、シバタ。向こうの教室で台本拵えてたんじゃないんかや。

シバタ

うん・・・。ね、同じ生まれ故郷の人でも深山郷の人だけなんですか。

コンドウ

おらほの先祖は、天皇のみを敬い奉る、中世の誇り高き、漂白の輩だったっていうけど。

シバタ

「遠い昔、清和天皇の頃、伴大納言は放火の疑いで都を追われた。一族は、その後流れ流れて戸隠に行き、さらに流れて飯縄山に住み着いた」。

コンドウ

仲間だったんじゃねえかや。

会長

仲間？

コンドウ

里には住めねで、山に住んでる仲間だったかもしれね。

少し沈黙。

コンドウ

もーらしいことしたなえ、もーらしいな。

会長

もーらしい？

コンドウ

気の毒だつて。

会長

・・・紅葉さんが？

コンドウ

・・・。(うなづく)

シバタ

ここらあたりに伝わっとる鬼女紅葉のお話じゃ、都からやって来た征伐隊に、紅葉も子どもも殺されたことになつとるだ。

コンドウ

おらほの話はそうじゃねえ。征伐隊がやって来たところでおしめだ。だから、こんで、おーしめ。

会長

(ふと思ひ出して) なして来たーんか。

コンドウ

それで、山太郎がやってくるだ。

シバタ

え。

コンドウ

「ば、ば、ば、ばばばばつて風が吹いたら来るんでないかい」ばさまが言うし。深山郷のものが、山から里に下りて困つてつときつと来るつて。雪の夜、どうしようもねえ気持ちで、うごけねくねつて、閉じこめられたりしてつと・・・

風が吹いて、窓ガラスがかたかた鳴った。

コンドウ

紅葉さんの不思議な力は、山太郎に受け継がれてるしねか。

シバタ

おら、戻るし。

シバタ行った。

会長 山太郎って、なに？

コンドウ 昔っから山にえて、時々降りてくるだ。

会長 山太郎って、どんな恰好してるんだろう。

コンドウ なりはわかんね。みえねえんだもの。

会長 え。

コンドウ へー、誰もみた事はねえやし。

会長 ……。

コンドウ 山太郎の話は真正銘、深山郷だけのもんだし。

会長 どうしてだろう。

コンドウ 思うに、おら方の部落の希望だで。

会長 希望。

コンドウ あんましええことねえところだねえかい。だからじゃねえかな。山

太郎は、だからここにいろし。(心を指す)

会長 ……。

と、アオ、ハリー、マッスル、シマ君やってくる。

シマ君 あーあ。(腰を下ろす)

会長 なに。

アオ あーあ。(腰を下ろす)

コンドウ どした。

ハリー・マッスル あーあ。(腰を下ろす)

会長・コンドウ ……。

シマ君 ちっと、ずくでねな。(やる気、根気が出ないの意)

アオ ああ、ずくでね。

ハリー ごしてえ。(疲れた、気力が湧かない、の意)

マッスル ああ、ごして。

会長 力抜けてるな。

ハリー どうせようもねえだもん。やまねし。

アオ やまねし。

マッスル だから、やまねほうがええ。

ハリー そべろう。(横になろうの意)

皆降る雪を見る。

ハリー ああ、なんかはーるかぶりだ。

シマ君 なんだや。

ハリー ずく出して勉強ばっかせてたから、こんなしげんりするものも、は

ーるかぶりだ。おらもやらさるか、芝居でもお着でも。

コンドウ やらずやらさ。

シマ君 台本出来なきやしょーねえやし。

アオ あれ、シマ君もやるんかや。

シマ君 えだねか……。よっしゃやらさずか、山太郎。

皆、横になったりすわったり、力抜けたまま。

シマ君 ふんじゃ、景気づけによーでもねえ話しらず。

アオ あん、なにするだ。

シマ君 女衆の話しらず。

アオ ああ、しらず。

シマ君 マッスル、シバタとつきあってるだかや。

マッスル なんせった？

アオ おら、しらなんだ。

マッスル な、な、な、

ハリー 慌ててるしねか。

会長 へえ。

マッスル どしてせういう話になる。

シマ君 へえ、急に演劇目指すとかせうし。

アオ おら、しらなんだ。えれのとつつかまったし。

会長 失礼だつて。あれで柴田さん、案外鋭いよ。

アオ どころがさ。(マッスルに) つきあってるんか。

マッスル よーでもねー。(くだらねえ)

アオ チューしたんか、チュー。

コンドウが吼える。

アオ コンドウヒデキがたけたー。

コンドウ な、つきあったら、できるしねえか。

シマ君 なにー。

コンドウ くちびろふれたらできるしねえか。なー。

シマ君 おめ、さかかってうるせや。

皆笑う。

アオ くちびろくれえでできるわけねえやし。

皆笑う。

アオ おっぺえまでいけなきやできねえやし。ははは。

皆沈黙の後、それぞれ笑ったり考えたり。

シマ君 なあ、おめら。どうせてまぐあうか知ってえだか。

コンドウ しらね。

アオ しらね。
ハリー しらね。

シマ、会長を見る。

会長 知らねえよ、俺だって。

皆消沈するが、

マッスル べことおんなじなら。

皆 おせーてみ。

マッスル うん。

みなでこそそ話。

アオ せんぜられね。

コンドウ だども、べこはべこだし。

会長 そういうことか。

シマ君 嘘だってえってくれ。

ハリー おら、勉強、も、できねかもしんね。

マッスル べこのまぐわえは、壮絶なもんだで。

皆 ああ。

嘆息の中から、

コンドウ なあ、赤い玉の話ってほんとかや。

皆ががばと反応した。

コンドウ なあ、一升瓶二本までって知ってるかや。

ハリー しらね。なんかや。

コンドウ 人が一生で生産できる精子は一升瓶二本までって知ってるかや。

マッスル いんや。

コンドウ なあ、出し切っちゃったら、赤玉が出るって知ってるかや。

会長 ほんとかよ。

コンドウ そんなで赤玉の後は最後に、煙が出るって知ってるかや。

シマ君 しらねえって。

コンドウ 十日以上続けてこくと猿みてにずっとやりつづけるって知ってるかや。

アオ ひええ、おら手縛って寝るし。

コンドウ ふふ、おら、実はとっくに二本分出しただ。

マッスル じゃ、赤玉と煙・・・

アオ いやあ。

コンドウ (首を振って) まだいけとる・・・

皆安心した。

アオ 一度でいいからまぐわってみてえ。そしたら、おら死んでええだ。
シマ君 んだな。

コンドウ できるんかえや。おらほも死ぬまでに。
ハリ― こんなしなったら、おら、勉強、も、できねかしんね。

マッスル (ハリ―の様子を見て) 泣いてるんかや。
ハリ― 泣いてねって。・・・そしたら浪人だなや。あの家で宅浪なんてで
きやしねけど、仕方ねえ。

マッスル おめ、本気さ、またこれから一年も勉強する気かや。

シマ君 勉強、好きなんでねーか。

ハリ― だれー。

シマ君 ハリ―頭ええし、好きでやっとなるんだねーのか。

ハリ― やりっこー。(やるわけがない、の意)

アオ なして。

ハリ― ・・・深山郷のもんと口きかねかったの、怖えかったからさ。

シマ君 あん？

会長 怖い？

ハリ― 口きいたら馬鹿になるって、おっか言っただ。そりや、せんぜたわけじゃねえ。だども、怖えかったし。おっか、馬鹿になるから弟とも口聞くなつてせうし。

アオ 弟って、孝か。小一の。

ハリ― あん。年下と口聞いたら馬鹿になるってさあ。怖えて弟とも口きけね。馬鹿になったら、おめ、どうすんだって。なんもねのに、馬鹿になったらどうすんだって。深山郷のもんと口聞いて、おら、馬鹿になったらどうせよう・・・おら、そしたら価値ねえもん。そんなことねえよ。価値ねえなんてそんなことねえ。

ハリ― あるって。ほかなんもねえもん。

会長 なんもねえことねえよ。

ハリ― じゃ、なんだ。おら、なにある？

会長 ・・・

ハリ― ほれ、だから、だから、怖かったし、口聞くの・・・わかった。
コンドウ てーしたことね。

ハリ― ・・・

コンドウ おら、ほんとは深山郷のもんじゃねえし。

シマ君 なにこいてるだ。

コンドウ こいてねえ。

シマ君 こいてるだねえか。

コンドウ おら、橋の下で拾われたし。
シマ君 なに自信たっぷりにせっってる？

コンドウ ふんとの両親は、街衆で、工場（こうば）をやっとるだ。
アオ 前田鉄工所みてえな工場で働いてるだかや。

コンドウ 働いてるんでねえ、経営してるだ。

シマ君 はあん？

コンドウ そんなで、迎えに来るだ。黒塗りの車で。

アオ だいを。（誰を、の意）

コンドウ おらほを。

シマ君 夢でもみてんか。

コンドウ ふんとのおどさとおがさは英語をしゃべってるだ。

シマ君 はあ、おめ外人とはしらなんだ。でえてえおめとこの深山郷は、橋、
小川にかかっている木橋ひとつだねえか。あんな橋の下で拾われたか
や。

コンドウ し、市内でだし。ち、千曲川の、橋だ。おどさが出かけた先で拾わ
れただや。

シマ君 おめ、そのおどさと顔がそっくりだー。

コンドウ 育ってるうちに似てきたせうの。えだねえか。

ハリー おめ、おらほを心配してるうちに論理が破綻してるだねえか。

コンドウ とにかくてーしたことねし。えでねえか。

シマ君 じゃ、えだねかえだねか、深山郷だつてえでねか。

コンドウ ええさ。深山郷でええけど・・・。なんで、お赤飯炊くだや。

シマ君 あーん？

コンドウ おどさもおがさもじさまもばさまも喜んで、なんでお赤飯炊くだや。

皆顔を見合わせる。

アオ ・ ・ ・ 公務員試験受かったからでねえーの。

コンドウ そうだども、そねーに喜ばねってええしねえ。

マッスル 親方日の丸でくいっばぐれねえし。

コンドウ ・ ・ ・

マッスル おらほうも貧乏だし、正月の新巻鮭半身だし、そういうことだねか。

コンドウ おらほうは、シャケ切り身だし。

マッスル ・ ・ ・

コンドウ そんなで、食いっばぐれたこと、おらねーし。おどさやじさまとは
違うで、ありがただども、おら、犬っころじゃねえやし。おら、試
験受けてへえただだから、胸張っていくねんか。なんでお赤飯、陸
下に真っ先にお供えするだや。
シマ君 なんでもええだねか、えだねか。

コンドウ ……くいつぱぐれねとか、そんなじゃねえし。

会長 じゃ、なんで。

コンドウ 部落のもんでも、役場へえったら、皆の衆とおんなし扱いにするよ
うにって、触れが出ただで。そしたら、ちくせーことなんさ。

会長 ……でも、そういうのって、法律でさ、

アオ 法律じゃねえやし。

コンドウ そんなでも今年から、えままでと同じじゃダメだつて。触れが出たで。

ハリー あん。

コンドウ それが嬉しいんだや。ありがてくて、お供えしてるだや。おらほう
んとこじゃ、昔っから神棚に祀ってきただ。えれえ目にあわせられ
て、人間じゃねえみてえにえわれて、そのお方はなんにもしてくれ
なくても祀ってきただ。今度は世の中がひっくりけえして、おらた
ちを人間扱いしてくださるって、ちくせーあたりめえのことなのに、
なんにもしてくれなかったそのお方にお供えするだ。だどもお供え、
おらもわかるし。おどさもおがさもじさまもおばさも、えれえ喜ん
でるのわかるし。なんだか知らねけど、頭と胸んながひっちゃか
めっちゃかになったみてえだども、なぜだか、おらも嬉しいんだ…。
あん、コンドウヒデキ。

ハリー ……あん？

コンドウ つらめしー話だなや…。(悲しいの意)。もーらしいな…。
シマ君 もーらしい。

少し沈黙。

コンドウ なんで、こんな話になっただや。

会長 やまないから、かな。

コンドウ だども、おら、赤玉の話とおんなしくれえこええだ。

シマ君 なにー。

コンドウ ほんとにおらほが、役場いって、どうだか。おんなじ扱いてどう
いうことだか。やっぱしけぶったがられるんじゃねえかや。(泣き
そうになつて)おめ、シマ君、一緒に役場ついてくれねだかや。
(泣く)

アオ ……シマ君、クレタ精密機器に就職口が決まってるだで…。

しばらく沈黙。

コンドウ わかってるし。親からしたら贅沢な話だし。

マッスル んでも、見えてるからつまんね。

アオ あん？

マッスル おら、畜産やったら見えてるしねかそもったら(思ったら)、やん

なっただ。おらほに土地もそうあるわけだねえし。おっとお見てたら先見えてるし。おっとおもしいちゃもそうしてきたけど……。
おら、十年したら、なにしてるよに見える？
どー？

顔を突き出すマッスル。

コンドウ
べこ飼い。

マッスル
うわあ。顔かえてし。

アオ
はん。それでも見えるし。

シマ君
(アオに) みさけーねえな。マッスルほー、何に見えるかや。……
おらほは。

ハリー
シマ君は、いいし。サッカーで入ったし。おら何にもねえし。

シマ君
てめ勝手なことばっかせうな。

ハリー
どしててめ勝手だ。

シマ君
ちくせーこというなや。サッカー一生できねし。やだくなってもやらなきやいけねし。そんなのええんか。

ハリー
ええ。えだねか、えだねか。

シマ君、ハリーを殴る真似。

ハリー
えくね。

シマ君
みんな、それぞれだし。何に見えるし。(ハリーに顔をつきだし)
ハリー
(見ていたが) わかんね。自分で窓ガラスさ、映してみるし。

シマ君、窓ガラスに顔を映す。マッスルも行く。みんなも行く。会長だけ行かない。みな反対側の窓にも行って映してみる。やがて、嬉しそうに、

シマ君
わかんねえし。な。

コンドウ
(確信として) わかんね。

ハリー
まだまだわかんねし。

マッスル
だれもなんになるかわかんねし。まだ、決まってねえし。

アオ
そんで、おらは、おらに見えたし。

皆、アオを見た。

会長
……おらは、おらで、みんなそれぞれだし……

皆、会長を見た。

シマ君
なんで見ねえだ。

会長
……

シマ君
なにー。なんで見ねって言うてるだ。

会長 見たくねえから。
シマ君 なあ、やっぱり東京とここは違うんか。
会長 よくしんね。
シマ君 そういう言葉使うなや。
会長 こことは違う。
シマ君 じゃ歸えりてえんか。
会長 でも違わない。
シマ君 なにー。
会長 こっちこそ、なにー。
シマ君 だからつかうなってせってるだろ。
会長 なにー。

シマ君、会長つかみ合いになる。皆二人を引き離す。会長行こうとする。

コンドウ どこいくだ。
会長 様子見てくる。シバタの。

会長行く。雪が降っている。

マッスル 予餞会終えたら、卒業だー。
アオ なんか、おら卒業したくね。
シマ君 そんなでも、ずっと教室におられるわけねえ。
コンドウ 雪やまねでほし。
ハリー え。
コンドウ やんだら外行かねばならねし。やまねでほし。
ハリー やまねでほし。
アオ なんになるんかや。
コンドウ ん？
アオ おらたち、なんになるんかやあ。
シマ君 なにー。
アオ 十年たって、二十年たって、なんになるんかやあ。
マッスル ならねかもしんねな。なんにも。
シマ君 しんねな。
コンドウ しんね。
アオ しんね。
ハリー しんね。
マッスル なあ。おらたち、いってえどこにいくんだや？

と、と、と風の声。山太郎が現れた。

山太郎 山太郎です。

暗転。闇に声が聞こえる。

ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば
飯縄山から吹く風が ば ば ば 粉雪さ 舞上げた
粉雪紛れて 山から太郎さ やってきた
なして来たんか

問いかけて途切れる。

5

まったく前景までの教室と同じような場所だが、実はシバタが台本を拵えている違う教室。時間は先ほどの景のすぐ後。シバタが彫刻刀で、机に何か刻み込んでいる。刻み終わって、

シバタ それから、風が吹きました。

いつの間にか会長がやってきていた。

会長 いけないんだ。

シバタ 賢人君。(慌てて彫刻刀を机の中に隠す)

会長 その机も学校の備品だから、一応。

シバタ うん……。いつから見ただか。

会長 少し前から。何熱心に掘ってたの。(と見ようとする)

シバタ いけね。(と隠す)

会長 いいじゃない。

シバタ えけねって。

会長 ……

シバタ わからねけど、窓ガラスに映った自分の顔見とったら、なんか書かなきゃって、思ったし。

会長 ノートにでも書けばよかったじゃない。

シバタ そういうんじゃないし。刻み込みてかったっていうか……

会長 (シバタの隙をついて、机の文字を)「ゆっくりと立ち止まったこ

の日のことを忘れないように。」

シバタ あー。

会長 「雪降る日の、なにもないこの時を……」これ、シバタさんが？

シバタ

書いてみただけだし。肝冷える。

会長

へえ。「ゆっくりと立ち止まったこの日のことを忘れないように。

雪降る日の、なにもないこの時を……」芝居の台詞みたいだね。シバタさんちょっと言ってみてよ。

シバタ

え。いえね、いえねって。こんな台詞。あ、台詞じゃねえか。でも、

こんな、自分じゃぜってえいわねような台詞がいつてみてえ。ああ、何言ってるだ、おらやだ。

会長

できた？

シバタ

え。

会長

台本。

でけたって、そんなすぐに出来ねえし。出来るかどうかかんげえてただけだし。……なかなかできね。

会長

……。

シバタ

みんなは。

会長

うん、向こうにいる。

少し沈黙。

シバタ

……えきできね。

会長

え。

シバタ

……。

会長

(シバタから離れて) ねえ、なんで今度は野添や田中は出ないの。

シバタ

え。

会長

その予餞会の三年生のお返し。お肴？

演劇部の発表って訳でねえし。あの人たちは、まだ進路、いろいろ忙しいから。それに劇やるって決まったわけねえし。こんただこと今日になっちまったから。

でも、みんなその気になってるみたいだよ。嘘こくでねって。

シバタ

嘘じゃないって。よかったじゃない。

会長

……したら雪えっぺふったおかげかや。

シバタ

なんでそんなにやりたいの。

会長

え。

シバタ

芝居。

会長

……こてーらんねから。

シバタ

うん？

会長

せりふなくても、こてーらんねから。幕が下りて、おしめになった

シバタ

とき。

会長

……。

会長

……。

シバタ せいいつぺやってると、こんただ自分でも、なんか・・・、賢人君もそういうことねえだか。

会長 とりあえずは・・・。おれ、みんなと違うみたいだし。

シバタ ねえ、やっぱりわからないんだ。クラブ活動なのに台詞一つもないんだよね。それでどうして。

シバタ ・・・・
どうしてかな・・・
ぶすだから。

会長 え・・・。あ、そういう意味じゃなくて・・・、どうして、そんなに、
シバタ えきできなくなるっ。

少し間がある。

シバタ 人生はおんぶてんぶ。
会長 え。

シバタ 「おんぶてんぶに生きてらさ、そしたらこのざまだ」。おっとがえうんさ。ずっとただ働いてきて、気がついたらこのざまだっておつとがえうんさ。ええことなかった、そういうんさ。家におつたら、そつたらごたく毎日聞かんきやいけなくて、えき、できなくなるよ
うな気する。

会長 運否天賦か。

シバタ おんぶてんぶ。そんないやだし。

会長 だから、東京行くのか。

シバタ うん。だから、誰でもへえられる学校行くなってさ、えわれてもいくし。どっかいきてえし。

会長たばこに火をつける。

シバタ 賢人君は、推薦断って、東京にえかなきゃどうするんだや。

会長 まだ、わかんないけど・・・、前ほど東京に帰りたいって思わないんだ。

シバタ どうしてだ。勉強も出来てスポーツも出来て、前にや東京にすんどったのに。

会長 俺、案外不器用なんだぜ。でも、どうしてかな。

シバタ わかんね・・・。

会長 別にやる気がないとかって訳じゃないんだ。俺だって、その、こてーらんねことあつたらいいなって思うよ。
シバタ そうだねえかい。

会長　でも、こっちに来たら、そんなに慌てなくてもいいのかな、そう思うようになった。俺は俺にできること。それがなんだかわからないんだけどさ。

シバタ　気のなげえ話だ。

会長　かもしれないね。

シバタ　それになんだか夢がねえ。

会長　でも夢みたいな話じゃなかったって、それがこてーらんねってことあるかもしれないし……。わかんねえか。

シバタ　わかんね。

会長　シバタさん。こてーらんねこと、あるといいね。

シバタ　・・・賢人君って、不思議だよ。

会長　そう？　なんかみんなと違うしな。

シバタ　変な意味じゃねえだで。なんかあんべえいいし。

会長　え。

シバタ　ありがとう。

会長　はあ？

シバタ　黒板書かれたとき、消してくれてありがとう。

会長　・・・ああ。

シバタ　メガネザルとかしやべらザルとか書かれて、えやだったけど、賢人君が消してくれたから、えかった。・・・どんな思いで消してくれたかや。

会長　え。ああ、でも、あれは・・・あの、シバタさん、

シバタ　なんね。えっちゃなんね。えわんでもええし。

会長　・・・でも返事待ってるって、言ってたじゃない。

シバタ　えわんでもええし。

会長　・・・

シバタ　黒板のお礼、このめえ言えなかったの言えたし。だから、ええ。

会長　・・・

シバタ　な、歩いっとったら、どこかえくのかや。

会長　どこか行くだろ。

シバタ　どこへえくんだろ。

会長　どこかへ行くだろ。

シバタ　なら、いいとこえけるとええな。

少し沈黙。

シバタ　なんだから東京えきて。

会長　お、ん、な、じ、だっ、て。

シバタ　そえでも、えかなきやわかんねし。

会長 うん……

二人遠くを見つめる。

シバタ ……手、はじかんできた。

会長 ストープあたれば。

シバタ うん。

だが立ったままいる。会長、行ってシバタの手を握る。シバタびっくりして離そうとするが、会長強く握っている。

シバタ ええって、ええって。

会長 手冷たくなると台本書けなくなるんじゃない。

シバタ うん。

シバタ、自分に触れてくれる人の温かさをほんの一時、感じた。

シバタ ……でも、ええって……えきできねから。

手が離れた。二人離れた。

会長 ……(書きかけのレポート用紙に目をやり)「鬼女紅葉伝説」作、

甲子千春……

シバタ ああ、ああ。また肝冷える。

会長 ペンネーム。

シバタ えんやもともと芸名。

会長 芸名……、甲子千春……。

シバタ 甲子は、干支の一番目で縁起がいいんだや。

会長 へえ。よく知ってるね。

シバタ 図書館で調べたし。それで、千春は千の春。やっぱりおらの名前の美春の春の字は残して……おらが美しいってのはええくらかげんだし。千回も春が来たら、ええし。甲子千春。そうした名前だ。

会長 ふーん。甲子千春か……

シバタ えらい馬鹿げてえと思っとるんかや。

会長 思っでないって。

シバタ ……そんなんでもええし。

会長 え。

シバタ えらく馬鹿げたことでもかんがえんくちや、おつとろしくておつとろしくて、おられんし、東京の学校なんかいけねさ……山太郎きてくれねかな。

会長 え。

シバタ 芝居の話だ。

会長 ああ、お肴。

シバタ 山太郎が活躍する話にしてえだ。なかなかうめえこといかねけど。な。なして、紅葉はあんなし凶暴になったんかや。

会長 ……
シバタ なして、深山郷の昔語りは、「こんでおーしめ」で突然終わるんだかや。

会長、シバタ、しばらく黙った。

会長 山太郎は、希望だつてさ。

シバタ 希望。

会長 コンドウヒデキがそう言った。困ってるときっと来る…

シバタ 希望。山太郎は希望の星。

シバタ、書きかけの台本を手に取った。考えている。

会長 ……山太郎、こねえかな。

シバタ え。

会長 おれ、山太郎なんだ。

シバタ なにえってるだ。

会長 おれ、山太郎だ。恨みの子供。都を追放されて、この里にやってきて、それでまた都へ上ろうと周りの村を襲って殺された母親の無念、今こそはらすんだ。ガオー。

と会長、シバタを追い回す。

シバタ おっかねえ。

しばらく沈黙。

会長 嘘。

シバタ わかってるし。

会長 なんか、じれってーんだ。

シバタ わたしだって、じれってーさ。

しばらく間があり、

会長 ねえ。俺たちの話にしたらどうだろう。

シバタ え。

会長 お肴。芝居。

シバタ どういうことだよ。

会長 季節外れの春の大雪に閉じこめられた少年少女。しんしんと降りしきる雪。どうしようもない気持ちで、うごけなくなって、閉じこめられていると、

シバタ そこへ…。

山太郎 はい、正真正銘高校三年生です。どうせてこんな時期に転校してき
たかってえうと、おら、おっとの仕事のかんけーで出席日数が今年
はたりねえで留年だや。だども、れーねん（来年）もちよっくら休
まなきやえけねし、ちつとでも今年から出とった方がええってえわ
れて。それで転校してきました。

シバタ みんなとは会ったんかや。
山太郎 会いました。予餞会で演劇をやる話で盛り上がって、そえでおら、
台本の様子見に来たんだや。

シバタ したらほんとにみんなでやれるってことかえ。太郎さんもやらず。
山太郎 はい。僕の役は、

会長 （思わず）山太郎。ㄋ
山太郎 ええ。（シバタに）みんな待ってましたよ。
シバタ じゃあ、すぐに戻るし。

シバタ行く。会長も行くとする。

山太郎 おらも行かずか。
会長 行かず。

行きかけて。

会長 まだやまないんだな。
山太郎 もうちつとだ。

会長 ・・・。
山太郎 ほんとは、深山郷のもんだけだども、おまえた、特別だ。
会長 なに。

山太郎 おめは、おんなし転校生だしな。おら、ふんとによく思えや、
えつでも来るだで。東京ふうにいえば、心の底から願えばいつでも
現れる、だし。

会長 ・・・。
山太郎 もうちつと待ってるや。今、来るで。こー。こー。こっちこー。
会長 おい。

山太郎 こー、こー、こっちこー。
会長 だれー。

山太郎 ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば

山太郎が風の音を口ずさみ始めた。後ずさりする会長。やがて、会
長の姿は消え、皆が現れる。

ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば ば
飯縄山から吹く風が ば ば ば 粉雪さ 舞上げた
粉雪紛れて 山から太郎さ やってきた

なして来たんか

山太郎いつのまにかいない。

6

皆のポーズが決まった。

シマ君 えだねかえだねか。オープニングは、なからこんな感じしねか。
アオ するする。

ハリー 次は、山太郎の登場シーンかんげえなきやいけねし。
コンドウ だな。

最初の教室。彼らは、「お着」の稽古をしていた。

マッスル おら、役あるだかや。

ハリー おめ、雪の役。

マッスル え。(と雪をやる)

ハリー じゃ、風の役。

マッスル 風をやる。

ハリー 才能ないんだねーか。

皆笑う。

マッスル んでも、おめーやさ。

途中からやってきていたシバタは泣き顔。

コンドウ どうしただ。何べそかいてるだ。

シマ君 うれしいんさ。みんながこのお芝居やつつけてるから。な。

コンドウ あれ、会長と山太郎はどうせただ。

シマ君 山太郎でねって。

アオ 山田太郎だ。だども、おらほもてつきり、昔語りみてに山から太郎
が来たと思ったし。

マッスル だ、だれー。

アオ だれーって、いっちゃんおでれーたでねえか。

ハリー で、どうしただ二人。

シバタ うん、今来ると思う。

皆、待つか、という感じ。

アオ へへへへ。

シマ君 なにおかしいだ。

アオ へへへ。

コンドウ きびわりいやつだし。

アオ きびわりいのは太郎だし。でも、なんかかっこええし。都会的だし。

コンドウ ふんとだな。

アオ ふんとさ。白い毛糸の帽子がよく似合うし。

コンドウ 似合うし。

シマ君 いいアイデア、もってるしねか。

マッスル 太郎のオーピングのアイデア、抜群だし。

コンドウ 太郎のおどさ、県の土木課っていったし。

アオ いったし。

コンドウ 役場にもえっぺしりあええるって。

アオ いったし。

ハリー えかったな。

コンドウ えかったし。県のいうのなら役場もまーで聞くだし。

アオ 聞くだし。

コンドウ ・・ふんとにきてくれたんかや。

マッスル あれが山太郎の役ならびったしこんだなや。(びったりあっている

の意)

シバタ なんだね。あの、

ハリー なんだや。

シバタ おら、一人でかんげえてもアイデアでねし、今みてにみんなと一緒に

かんげえてくれねか。

シマ君 いいんだねえのか。

ハリー そういうのなら、やっぱり山太郎でねえか。問題は。

シマ君 なんだ。へー、山太郎っちゃ、どうした格好してるだかや。

コンドウ なりはわかんねやし。へー、誰もみた事ねえやしわかんね。

皆、考える。

アオ あー。山田太郎とおんなじなりでええし。

シバタ ああ、ええし。

シマ君 なんかイメージあうし。

アオ な。な。なんかびったしこんだなや。

シバタ うん。

コンドウ ええかもしんねな。

アオ な。でも、あんなしかつぶくのええ山太郎もおもしろやなあ。

コンドウ 太郎、かつぶくは別にいくねえだよ。

アオ へえ？ あのずうてえでか。

コンドウ どっちかっていやあ、痩せてるしねか。

アオ はあ？ 八十キロはあるしねか。

ハリー 馬鹿えってんじゃねえや。

アオ なして？

ハリー 背いはあったで、横っはばは、ねし。

コンドウ 背いは低かったし。

ハリー 背いはマッスルよりえっぺあったし。

マッスル いっくらなんでもおらよりたけえってこたーね。こんくらいじゃねえか。

アオ なんだ。で八〇キロだし。

ハリー いや、まちげね。あったし。で、がりがりだ。

シマ君 ちっと、ちっと待て。おかしいしねか。

シバタ おら、背いもかつぶくもえらく普通に思ったただども・・・

シマ君 山田太郎さ、白い毛糸の帽子さ、かぶってたんは・・・

皆うなづく。

シマ君 んなら、山田太郎さ、どんななりしてただ。

アオ せーふく。(制服)

シマ君 どんなだ。

アオ おんなしせーふく、に白い帽子。

ハリー 下はせーふく。だども上はせーター着とった。・・・脱いだんかや。

マッスル せーふく。だども色ちげえ。千曲高校みてな、深緑の。

シマ君 おらも、そうみただ。

シバタ あたしは、おんなじせーふく。

コンドウ えんじの、えんじの、かっちょええブラザー。

シマ君 ブラザー？

コンドウ ブレザー。

シマ君 ミシンじゃねえだで。

コンドウ おら、頭おかしくなったかや。

アオ あー。

コンドウ なに。

アオ あー。

シマ君 だから、なにー。

アオ 明かりがついてたから、こっちさ来たって。

マッスル うん、うん。

アオ だからついでだから、あっちからこっちさきたって。

コンドウ あん、あん。本館からここへ。

アオ あん。上っ張り、上っ張り。

ハリー なにー。

シマ君 はっきらものせえ。

アオ (口から言葉が出てこない)

シマ君 会長と・・・太郎はまだこらさずかー。

アオ そんな、上っ張り、服さ、濡れてなかっただや。

コンドウ なにー。

アオ 雪んなか、大雪んなか来たし、なんもどこも濡れてなかったし。

皆沈黙。

シマ君 なにー。

コンドウヒデキが動いた。続いて雪崩を打つように皆出ていく。こっちはだめだし。あっちさいくし。おっかねえおっかねえ。シバタがえけね、シバタがえけね、など声がする。残ったシマ君に戻って来たアオが、

アオ (泣きそうになりながら) 暗れえ、暗れえし。ペンシルライト。ペンシルライト。

シマ君、アオにペンシルライトを渡す。アオ行く。

シマ君 アオ、照らせや。照らせて。目あけろって。

沈黙。

シマ君 なにー。

と皆を追う。

7

甲子千春が、教室にいる。千春は冒頭の恰好のままだ。彫刻刀で、机になにか刻みつけている。刻み終わって、

千春 それから、風が吹きました・・・

千春、やってきていた会長に気がつく。さっき忘れていった携帯灰皿を取りに戻ったのだ。

千春 ……くんばんは。

会長 ……こんばんは。

千春 (慌てて彫刻刀を机の中に入れて) ……おんなじだ。

会長 え。

千春 ああ、これ。(と灰皿)君の。

会長 ええ、そうです。

千春、近づいて手渡す。

千春 はい。

会長 はい。

千春 びっくりしてる？

会長 はい。びっくりしてます。

千春 わたしも。

会長 え。

千春 賢人君、唐沢賢人、会長。

会長 どうして。

千春 やだー、やっぱり。あー、ほんとなんだ。びっくりした。こんなこ

と……、

千春、改めてここが懐かしい場所だと感じる。

千春 おったまげた。嘘みてーだよ。

千春、会長をじっと見ている。会長、困って、イスを持ってくる。

千春 ありがとう。

会長 ……？

千春 (じつと会長を見ていたが)盛り上がったね、あの時。

会長 え。

千春 エンディング決まったとき。

会長 え。

千春 「鬼女紅葉」のエンディング。「月光仮面」

会長 ……？

千春 ほら、コンドウ君が「山太郎は、こまっつと助けに来るおらほの希望の星だ」って。そしたら、シマ君が「正義のヒーローしねか」って。マッスルが「んじゃ、山太郎は深山郷の月光仮面しねか」って。おら、月光仮面はいくらなんでも古すぎる思っただども、アオが「じゃ、エンディングは、サンガラスかけて、みんなで月光仮面歌わず」って。そこで会長。決めのポーズはこれだ！

(千春、立ち上がって歌い始める。「どこの誰かは」で始まる子供向けテレビドラマの主題歌。以下は千春の一人芝居)

〔月光仮面のおじさんは〕のくだりで、「ん、ん、おい山太郎はおじさんじゃないだろ」（と会長を指す）（頭を抱えて）「こりゃ、ダメだし」。そしたらシマ君「えだねか、えだねか、おじさんでねくたってええだねえか」「ちくせーちくせー、えだねかえだねか」それで、（と歌詞の月光仮面を部分を山太郎に変えて歌う。）「完璧なエンディングしねか。」「こんでおーしめ」（と笑いこける）笑ったね、あの時、みんなで笑ったね、おかしかった。（あの時のように笑う）

会長

・・・。

千春

あんなに笑ったの、生まれて初めてだった。

会長

・・・。

千春

・・・楽しかったね。

会長

・・・あの、なにがなんだか。

千春

そうか、そうだよね。まだ、向こうの教室に戻る前だから、みんなでやろうって決めたところだもん、エンディング決まっていんだよね。

会長

・・・。

千春

ごめんね。あんまり懐かしかったから・・・、あたし・・・。

千春の胸にこの十年が去来する。泣く。

千春

ごめんね。

会長

あの、卒業生の方ですか。

千春

うん。そう、だね。十年になるのかな。・・・あたし、東京に行っただけだよ、なんもかんも思い通りにいなくて、で、「気がついたらこのざまだ」（笑う）深山郷の月光仮面、何度も歌ったよ。

会長

山太郎来ないかなって。♪月光仮面の山太郎〜（笑う）

千春

・・・。

でも、もうそんな歌も忘れて働いてたのに。そんな仕事も急になくなっちゃって。あの時、言ってたよね。あたし、あの時、東京行くことで精一杯でわからなかったけど、今、思えば、賢人君すごいよ、すごくだいたいと思う。

会長

・・・。

千春

「お、ん、な、じ、だって」。ようやくわかった。

会長

・・・。

千春

賢人君、あの時、ゆっくりとだけど、いろんなことを考えて、自分にちゃんと向き合おうとしてたんだよね。少しだけ大人だったんだ。（首を傾げてどこかからの声を聞くように）あんまり時間がないみたい。

会長 今、わかりたいんだ。
千春 え。

会長 俺、ほんとは今わかりたいんだ。自分が、なんになれるのか、なれないのか、やっぱり不安なんだ。

千春 そう、賢人君だって不安だったんだよね。でも、あなたは大丈夫。どうして？ 俺はなんになる？

千春

あなたがなんになるか、わたしは知らない。知っていてもそれは言えない。でも、なんになったっていいじゃない。ならなくたっていいじゃない。自分で言ってたでしょ。勝ち負けの話。それから、価値ねえなんてそんなことねーよ。

会長

・・・おらはおらで、それぞれだし・・・
だから、あなたは私の山太郎なんだよ。

会長

・・・
希望の星。

千春

・・・

雪降る日の、何も無いあの時、みんなが何を思い、どんなふうに漠然とした不安を抱えて過ごしていたか、あなたがシバタミハルがどんな思いを抱いていたのか、それを、

会長

それを・・・
忘れないで。

千春

・・・

会長

大丈夫だったこと。忘れなければ、きっと。
ほんとうにか。

千春

ほんとうに。今だから言えるんだよ。あの時はうまく言えなかったけど。

千春、会長を抱きしめる。やがて千春、泣いているのか。会長、ゆっくりと千春の体を離し、手を握る。

会長

大丈夫ですか・・・

千春

・・・

千春

私、今こんなんだけど、やっぱりこてーらんねことあったらいいなって思った。夢みてーなことじゃなくてもいいんだもんね。十年たったけどえだねえか。時間がかかるかもしれないけど、えだねえか。えだねえか。えーだねえか。今日ここに帰ってきて、また君に会えたから。ありがとう。

山太郎がやってきた。会長にはその姿は見えない。

千春
ああ、大変だ。
え。

千春
時間がなくなっちゃった。肝心なこと忘れてた。(また耳を傾けて)
まだもう少しいいかな。

山太郎うなづく。

千春
あのね、どうも私は直接会っちゃいけないルールになっ
てるみたいなの。

山太郎うなづく。

千春
だからお願いできるかな。シバタミハルに伝えてほしいの。机の上
に書いてあること。

会長
机の上って・・・

千春
それだけでいい。もう時間がないから。帰ってまずは、仕事を探さ
なきゃ。毎日毎日知らない人に電話するのもいやだったけど、なく
なったらなくなったで困るもんだなあ。

山太郎、千春に近づく。

会長
あの。

千春
ほんとに時間がないから。

会長
名前を。

千春
甲子千春よ。

会長
(うなづく)

千春、窓ガラスに映った自分の顔を見て、

千春
ねえ、どうなるんだろうね。

会長
なにがですか。

千春
これから先、また十年も二十年もたったら。

会長も自分の顔を見た。

会長
さあ。

千春
そうだよ。きっと大丈夫だ。その机よ。

会長机に行く。

会長
「ゆっくりと立ち止まったこの日のことを忘れないように。雪降る
日の、なにもないこの時を」

机には、続きが刻まれていた。

会長
「それから風が吹きました。歩き始めるそのために。また歩き始め

るそのために」

会長、顔をあげると、すでに千春と山太郎はいない。

8

降りしきる雪がやんだ。立ち止まっていた少年少女達が走り出す。やがて、皆、まっすぐと立った。遠くから、かすかにかすかに、皆の歌うエンディングテーマ「深山郷の月光仮面」が聞こえてくる。

終わり

この作品は、著作権法によって、保護されています。掲載、上演の際は、作者の許可を得てください。

info@pronstage.com